Osaka Shoin Women's University Repository

平安和文における「おぼしめす」の表現価値

――源氏物語を中心にして――

中村一夫

一

平安和文に現われる敬語のあり方および体系は、それぞれの作品の論理に密接に結びついて極めて厳格な構造を見せている。人間の主要な動作に関わるもの、日常の基本行動に関わるものには、それに対応する敬語動詞が見られ、それぞれ幾段階かの敬意の差異を表現価値として描き分ける細かさまで見せているのであった。平安時代には社会的な序列・階層の把握が待遇表現（待遇評価）決定の大きな要因となっていったのにつれて、それに呼応する敬語表現が要請され確立されていったためである。特にいわゆる敬語においては極めて整然とした体系が見られる。すなわち敬語専用動詞をはじめとして補助動詞・助動詞を動詞に自在に組み合わせることで、細やかな序列・階層化が表現として可能になったのである。

本稿ではこうした序列・階層化が明確に抽出できるものの中で「おもふ」系の敬語、中でも最高敬語の位置にある「おぼしめす」の語彙的意味とその待遇表現価値について考察を加えることにする。それは次にあげる理由による。

「おもふ」系の動詞を敬意の軽重にそった序列で並べてみると、「おもふ」「おもひたまふ」「おぼす」「おぼしめす」という形で、和語による線条の敬語体系ができあがっているとされている。しかし、単に動作主の「おもふ」行為への敬意の表現であるならば、「おもひたまふ」もしくは「おぼす」があれば十分であろう。一般に敬語専用動詞が頻用されている動作・状態については、一語で属性と待遇価値を表現することができる総合的表現が優先されて、動作・状態そのものである属性と待遇価値を分けた分析的表現はほとんど見ることができない。ところが、「おもふ」系の場合、幾種類かの尊敬語の表現形式が現われているのである。したがって「おもふ」系

Osaka Shoin Women's University Repository

の尊敬語がすべて同じ待遇的意味や表現価値を表わしているということではないことがうかがえる。なぜ「おもふ」系の敬語の体系はこれほどまでに細かく階層化がなされなければならなかったのだろうか。これまでの研究ではこの尊敬語の序列に関して敬意を受ける動作主の社会的な地位・身分差に対応するという指摘がなされている。[注1] しかし、これらは「おもふ」系の表現形式の語彙的意味や待遇表現価値の差異を考えようとしたものではなかった。こうした未整理となっている点を明らかにしようとするものである。

本稿で調査の対象とするのは次に揚げる一五の平安和文資料である。[注2]

竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語・宇津保物語・落窪物語・源氏物語・栄花物語・大鏡・土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・枕草子

これらの中でも特に中心的位置にあると考えられる源氏物語の用例を主にして考察を加えていく。

一

まず最初に「おぼしめす」の「おもふ」系の表現形式の中での位置づけから見ていく。「おぼしめす」は「おもふ」系の敬語体系上、「おもひたまふ」「おぼす」の上位に位置する最高敬語となっている。先に述べたように一般に敬語専用動詞が頻用されている動作・状態については、一語で属性と待遇価値を表現することができる総合的表現が優先されて、動作・状態そのものである属性と待遇価値を分けた分析的表現はほとんど見ることができない。ところが、「おもふ」系の場合、総合的表現である「おぼしめす」「おぼす」の両尊敬語の他に、分析的形式である「おもひたまふ」の形も少なからず現われている。特に「おもひあかす」「おもひいたる」「おもひかへす」などのような「おもひ」を語基とする複合動詞に「たまふ」のついたものは枚挙にいとまがないほどである。「おぼす」は「おもふ」系の尊敬語の中では使用数の面から中心的な位置を占めるものである。「おもふ」と同様に「おぼす」にも「おぼしあかす」などの複合動詞の形が多く見える。源氏物語に限っても延べ使用数で「おぼす」が一八四三例、「おぼし」を語基とする複合動詞が一五五五例見えている。これは動作主の社会的地位・身分に大きく影響されることなく広く使用されるものである。表現主体の主観に基づいて待遇されるべきだと判断される人物の「おもふ」行為に対して、最も一般的に使用されうる語であるといってよい。

では「おぼしめす」「おぼす」と「おもひたまふ」の差はどこにあるのか。これは単に敬意の軽重という視点で説明されるべきものではない。「おもひたまふ」という表現形式は次に示すような性質を備えていることから、その点で「おぼしめす」「おぼす」との使い分けがなされていたと考えられるのである。そうでなければ総合的表現と分析的表現と併用された理由が見いだせない。

総合的形式と分析的形式の機能的な相違点をあげると、第一に客体尊敬を加えられるか否かという点がある。「おぼしめす」「おぼす」

Osaka Shoin Women's University Repository

には「おぼしめしたてまつる」や「おぼしめしきこゆ」「おぼしたてまつる」などという形式は見られず、一方「おもひたまふ」は「おもひきこえたまふ」という形式が見られる。客体尊敬を含む表現形式「おもひきこえたまふ」は源氏物語に五〇例を越える用例が確認できる。この客体尊敬の加わる表現形式が現われないということは、その被動作主に対して敬意が働かないことを示している。根来司氏は「源氏物語のある種の敬語」(『源氏物語の敬語法』一九九一年、所収)という論文で、上下尊卑の関係が動作主と被動作主の間で逆になるような謙譲語について、そこには動作主が被動作主に対して自分を抑制して相手に対する謙遜する心遣いを表現するものという説明を与えられた。この点については次に引く源氏物語の桐壺巻の同じ箇所の二つの本文を比較するとよくうかがえる。

この御方の御いさめをのみそ猶わつらはしう心くるしう思ひきこえさせ給ける(大島本)

この御かたの御いさめをそすこしわつらはしき事にはおぼしめしける(陽明文庫本)

これは東宮の座に光源氏をつけるのではないかと疑いを持つ弘徽殿女御に対する桐壺帝の反応を記すくだりである。大島本は青表紙本系、陽明文庫本は鎌倉期書写の別本である。末尾の所で陽明本は「おぼしめす」を使い、動作主である桐壺帝だけに敬意を表わしているが、大島本の方は「おもひきこえさせたまふ」という二方向の敬語を使用し、桐壺帝と弘徽殿女御の双方への敬意を表わしている。しかもここでは動作主の桐壺帝の方が被動作主の弘徽殿女御より社会的地位は高い。したがって本来なら動作主である桐壺帝へ向けても敬語だけあれば十分であるところだが、謙譲語を介することで女御を気遣う帝の心中が表現されることになるのである。これは連用修飾語として現われる「こころぐるし」という情意性形容詞の意味・性質とも相まって謙譲語の性質がよくうかがえる例である。対する陽明本には「わづらはし」しか見えないのは示唆的である。

根来氏は上下尊卑の関係が逆転する場合のみについて説かれたのであるが、さらに私はそれを謙譲語一般の性質として認めてよいと考える。それは謙譲語自身が被動作主への顧慮を間接的に表わす性質というものを本質的に持っているからである。先の引用はそれの典型的なものであった。この根来氏の「心遣いの謙譲語」を考えに入れると、動作主が被動作主に対して「おぼしめす」と思う時は、何等の顧慮も心遣いも加えないということを表わしているのである。つまり同じ人物が「おもふ」という行為をしても、動作対象によってその内容や態度が違うのである。

では謙譲語を付加することのできる「おもひたまふ」はいったいどういう表現価値を持っているのであろうか。

みかときさきとことにおもひきこえ給へる宮なれはすちことなり給をいとくるしうおほしたれとこと宮たちのさるへきおはせす(源氏物語・葵)

あはれに思ひきこえし人をひとふしうしとおもひきこえし心あやまりにかのみやす所も思うしてわかれ給ひにしとおほせはいまにいとおしうかたしけなきものに思ひきこえ給(源氏物語・

Osaka Shoin Women's University Repository

須磨）

前者は斎院の交替があって桐壺帝・弘徽殿女御の女三宮が立つことになり、両者が残念に思うというくだりである。後者は須磨に退去している源氏のもとに今は伊勢へ下向している六条御息所から便りが届く。その折の源氏の御息所への思いが描かれている。源氏は六条御息所に対して過去に抱いた種々の感情を思い起こし、憐憫の情を感じている。いずれも動作主と被動作主の社会的地位の格差は前面に出ず、むしろ一人の人間として相手に対する私的な心遣いが強調されていると理解されよう。「おもひきこえたまふ」の内包する感情表現は情意性形容詞をはじめとして具体的に抽出できることが多い。これらは対象に対する働きかけが強く感じられるものである。「おもひきこえたまふ」はある特定の限定された一点（人物・状況）への判断や思いを表わすことが多いと考えられるだろう。栄花物語からも例を引いてみる。

この御中にも、広幡の御息所ぞ、あやしう心ばせあるさまに、みかどもおぼしめいたりける。（栄花物語・巻一）

宣耀殿の女御は、いみじううつくしげにおはしましければ、みかども我御私物にぞいみじう思ひきこえ給へりける。（栄花物語・巻一）

この二つの例は村上天皇の女御に対する思いを記すものである。両者への帝の心の持ちようが「おぼしめす」と「おもひきこえたまふ」の違いとなって理解することができる。宣耀殿女御に対して「私物」と愛情を注ぐ場合は「おもひきこえたまふ」となっているのに注意される。それに対して「おぼしめす」は自分の妻妾全体を眺めて状況を広く捉え、その中の対象に対する全般的な判断や思いを承けているのである。こうした用例から「おもひたまふ」は単に「おもふ」に尊敬の補助動詞がついて動作主を待遇しているのではなく、対象（被動作主）への心遣いを表わしえる可能性があるという特別な表現価値を持っている形式であることがわかる。これもまた「おもふ」系の尊敬語の体系の中で敬意の軽重による単系列上に位置するものではないのであった。

このように「おぼしめす」は「おもふ」系の主体尊敬の系列の中で最上位を占めているのは確かであろうが、表現価値（機能的側面・語彙的意味）という点では「おもふたまふ」などとは等価ではない。動作主が同じでも動作対象の性質およびそれへの態度が異なり、場面に応じて他の表現形式が選択されるということがそれを如実に表わしている。「おぼしめす」は相手への顧慮や心遣いが働かないような状況で現われている。そしてそれはそう「おもふ」動作主の超越性をうかがわせているのである。

三

では「おぼしめす」の語彙的な意味はどのようなものであるのか。最初に動作主の性格から考えてみる。「おぼしめす」の表わす敬意は非常に高く、その動作主は天皇をはじめとする皇族が中心であるとされる。調査した平安和文での「おぼしめす」の延べ使用数は表

Osaka Shoin Women's University Repository

表1　「おぼしめす」の延べ使用数

	単純形	複合形	合　計
源氏物語	61	10	71
伊勢物語	1	0	1
宇津保物語	8	1	9
大和物語	3	0	3
平中物語	0	0	0
竹取物語	3	1	4
落窪物語	4	0	4
大鏡	89	18	107
栄花物語	657	95	752
土佐日記	0	0	0
蜻蛉日記	0	0	0
和泉式部日記	8	2	10
紫式部日記	2	0	2
更級日記	1	0	1
枕草子	10	1	11

の通りであるが、これらにおいてもこの原則はおおむね守られている。源氏物語では「おぼしめす」は六一例、また「おぼしめす」の複合動詞は一〇例見える。そのうち地の文には四五例現われる。ここで源氏物語における「おぼしめす」の地の文と会話文での動作主を一覧にする。ここでは同一人物であっても社会的地位が変化するのに連動して使用状況が変わっていることも考えられるので、使用された時点の呼称を使って分類した。たとえば朱雀帝、朱雀院は同一人物である。

源氏物語の地の文での「おぼしめす」の動作主

桐壺帝（16）・冷泉帝（11）・朱雀院（8）・今上帝（5）・朱雀帝・光源氏（各2）・藤壺・冷泉院（各1）

源氏物語の会話文での「おぼしめす」の動作主

藤壺・匂宮（各3）・光源氏・大君・桐壺帝・薫・浮舟・明石中宮（各2）・宰相の君・八の宮・中君・仏・女三宮・冷泉帝（各1）

地の文では動作主は光源氏の二例を除き、いずれも天皇をはじめとして皇族となっている。この徹底した態度は「おぼしめす」の表わす待遇表現価値が極めて限定されたものであったことを示している。これが会話文になると動作主が必ずしも皇族でなくても見えていて、光源氏以下高位の臣下たちにまで使用されることになるが、それは「おぼしめす」を使用する表現主体、つまり発言者の立場からの相対的な主従関係などに基づく認識の現われの結果である。これは動作主がある場面において条件を満たせば、客観的な社会的地位などを越えて「おぼしめす」を使うことができるということである。

かくうきことあるためしやけすなとの中にたにもおほくやはあなるとてうつふし〳〵給へはかくなおほしめしそやすらかにおほしなせとこそきこえさせはへれ（源氏物語・浮舟）

ほのかにもきこえ給はんこともきかせ給へしみつかんことのやうにおほしめしたることなといふにいとはしたなくおほゆ（源氏物語・手習）

この二例はいずれも動作主が浮舟である。落魄の八宮家の隠し子である浮舟は本来「おぼしめす」の動作主では当然あり得ない。しかし、右近・少将の尼という極めて社会的地位の低い人物にとって奉るべき人物として浮舟があるという条件下において「おぼしめす」が使用されているのであろう。

このように「おぼしめす」の使用は必ずしも客観的な社会階層の

Osaka Shoin Women's University Repository

認識を言語化したものではない。つまり表現主体にとって動作主が絶対的存在であると認識される条件下において「おぼしめす」という表現形式が選択されているといえるのである。これは敬語一般の使用法を鑑みてもいいえることである。敬語は言語主体の主観的心情と描き出される対象の客観的属性が一体となって現われる表現形式である。これは時枝誠記氏のいう主観客観の総合的表現であると考えられる。[注3] 使われて当然と思われる箇所でも、言語主体の心情や作品の論理によって現われたり消えたりするのは、普通に観察される現象である。「おぼしめす」が地の文において光源氏の二例を除き厳密に皇族関係に限定されている源氏物語でも、同一人物に「おぼす」などを用いていることから、必ずしもそうした人物に対して「おぼしめす」しか用いてはならないということはなかった。つまりそれ以外の表現形式でも敬意の表現は十分であったと判断される。ここからも「おぼしめす」の特別な表現価値がうかがえる。

さて枕草子や日記類での動作主も、和泉式部日記で敦道親王が式部に対して発言している会話文中で彼女が動作主となる「おぼしめす」が一例確認できるだけで、他のものはすべて天皇・中宮・皇族に限定されている。以下に一覧を示す。

日記類の諸作品における「おぼしめす」の動作主

枕草子

中宮定子（6）・一条天皇（2）・帝（2）・村上天皇（1）

紫式部日記

一条天皇（1）・中宮彰子（1）

更級日記

祐子内親王家（1）

和泉式部日記

敦道親王（8）・敦親王の北の方（1）・和泉式部（1）

土佐日記・蜻蛉日記　用例なし

他の諸作品においても地の文における使い分けは厳密に守られているといいえるが、ただ時代が下るにしたがってこの使い分けは崩れてきている。すなわち平安後期の大鏡や栄花物語では皇族だけでなく、広く高位の人物、特に藤原氏一族に対する敬意が厚くなっており、それに伴って「おぼしめす」もこれらの人物に多用されることになる。こうした「おぼしめす」の使用状況の裾野の広がりは、当初天皇を中心とする皇族だけの持つ属性（超越性・絶対性）であったものが、平安時代中期から後期にかけてそれが皇族以外にも広がっていったことをうかがわせていると予想される。また敬語史的にはもともと極めて高い待遇表現価値を有していたことばが、時代とともにその価値を低下させ、より敬意を補強する表現形式（二重敬語・三重敬語）を選択していったことなどとも深い関係がある。さらに藤原氏を中心に描こうとする両作品固有の論理にも大きく影響されていると考えられる。通時的な敬意の低下とともに共時的な表現価値による使い分けが考えなければならない。

では「おぼしめす」の表わす語彙的な意味というのはどういうも

Osaka Shoin Women's University Repository

のなのか。次に引用する例の動作主のあり方は「おぼしめす」の語彙的意味を考える上で示唆的である。

つみをもくて天けんおそろしく思給えらるゝ事を心にむせひ侍つゝいのちをはり侍りなはなにのやくかは侍らむ仏も心きたなしとやおほしめさむとはかりそうしさしてえうちいてぬ事あり（源氏物語・薄雲）

同じく最高位の敬意を与えられるべき神仏が一例とはいえ動作主となるものがあるというのは、それが極めて特殊な立場にあるものであることから注意が必要であろう。神仏という人知をはるかに越える超越的存在が「おぼしめす」の持つ表現価値と深い関係を持っている。ここでも「おぼしめす」は対象への顧慮や心遣いを越えた超越性や絶対性といった表現価値を内包していると考えられる。こうした性質は「おぼしめす」の動作主として現われる天皇・中宮をはじめとする皇族の持つ社会的な属性でもあった。次の竹取物語の例もそれをよく印象づける。

御門、なほめでたく思しめさるゝ事せき止めがたし。（竹取物語）

狩をよそおってかぐや姫に会いに行った直後の帝の感想である。帝という絶対者による判断が下されていることを「おぼしめす」は表わす。帝によって「めでたし」と認められることで、結果としてかぐや姫の美は絶対性や正当性を付与されることになるのである。

四

ところで、「おぼしめす」の表現価値を考えるためには、思惟・判断する内容も検討の対象とするべきであろう。この点が他の最高敬語との最大の相違点であると考えられる。動作主体の思惟や判断はそのまま関係する人物・対象への態度や両者の社会的・心理的関係を反映するものとなっている。

ところが「おぼしめす」によってまとめられる思惟内容には極めて高度な政治的判断から恋愛相手への感情までさまざまであり、これを形式的に分類することにあまり意味があるとは思えない。そこでその思惟内容に連動する行動様式について整理を進めるのが効率的であると思われる。具体的には「おもふ」という動作のあり方を見るのである。つまりどのように「おもふ」のであるか。そこで「おもふ」という動作に微妙なニュアンスを加えることになる「おもふ」の複合動詞を観察する。

「おぼしめす」には「おもひたまふ」「おぼす」に比べて複合動詞の形が極めて少ない。「おもひ〜たまふ」というような「おもひ」を含む複合動詞に「たまふ」のついた表現形式はことさら指摘するまでもなく一般的に多種にわたって使用されている。また「おぼす」も各種の語基と結合して複合動詞を形成する。源氏物語だけに限っても「おぼし〜」「〜おぼす」などの複合動詞は異なり語数で一八五種、延べ語数で一五五例も数えられる。これらは「おもふ」と

Osaka Shoin Women's University Repository

いう動作・行為のあり方の細かな描写に有用である。それに対して「おぼしめす」の方はわずかに一二種一二例だけである。これはどういうことを表わしているのか。

源氏物語に現われる「おぼしめす」の複合動詞（すべて使用数1）

おぼしめしいづ・おぼしめしかずまふ・おぼしめしかはる・おぼしめしなげく・おぼしめしなやむ・おぼしめしはなつ・おぼしめしまどふ・おぼしめしやる・おぼしめしよる・おぼしめしわく・おぢおぼしめす・をしみおぼしめす

「おもふ」および「おぼす」に多数の複合動詞があるというのは、人間の思惟・判断に多様な姿のあることの現われである。単純形と複合形の比較を待つまでもなく、複合形の方がより分析的で具体的な描写になっている。それに対して「おぼしめす」に複合動詞がほとんどないのは、「おもふ」という行為の多面的な姿の微妙な描き分けが本来の目的ではないことを表わしている。単に敬意の軽重の差だけなら、同じように複合動詞が現われてしかるべきであるが、そうならないのは「おもふ」や「おぼす」と「おぼしめす」では語彙的な意味が異なっているからにほかならない。これは第三者である表現主体が絶対的に存在する動作主の具体的に思惟する内実まで踏み込めないことを表わしていると考えられる。心情の微妙な描き分けよりも客観的にその判断のあること自体を描くことが主眼である。その結果、動作主の内面の分析不可能な様子を描くことになる。

複合動詞の形は各作品における独自なものだと考えられる。[注4] このような複合形はその場面でその都度作り出される性質のもので、単純形に比べて臨時的な形式である。特に栄花物語において極めて多彩な「おぼしめす」の複合動詞が見られる。用例は四八種、述べ使用数九五例にのぼる。これは「おぼしめす」の待遇価値の低下とそれに伴う独自の表現価値の喪失による。つまり「おもふ」「おぼす」「おぼしめす」の線条的な敬意の段階だけが認められ、その結果「おぼしめす」は「おもひ」「おぼし」などの語基と内包する語彙的な意味はなんら変わりがなくなってしまったと考えられるのである。ここでは単なる「おもふ」動作の敬意の段階的な相違でしかない。

ところで、語の根本的性格を表現課程に求めた言語過程説により、語の類別の根拠をもその過程的構造形式に求めた時枝誠記氏は、一切の語について概念過程を含む形式である詞と概念過程を含まない形式である辞に分類された。「おぼしめす」が複合動詞となりにくいことから、その思惟する動作主が分析不可能な状態で絶対性や超越性を保持していることを把握したのであるが、さらにここで「おぼしめす」という詞にまつわる辞を調査することで、表現主体のこの敬語動詞への態度がうかがえると思われる。これは描き出される事態への態度という形で辞の部分が表現されているはずだからである。「おぼしめす」という言表事態が話し手によってどのような事態として位置づけられ認められているのかを調査するために、このことばに下接する助動詞を整理した。例は次のように採取した。

先帝、いとあはれにおぼしめしたりけり。（大和物語）

Osaka Shoin Women's University Repository

この例では「おぼしめす」に「たり」「けり」が下接していると判断し、それぞれ一例とカウントしている。

こうして「おぼしめす」に下接するものから表現主体の言表態度を主に表わす助動詞だけを抜き出してまとめたものが表二である。ここには「おぼしめす」を含む複合動詞は省いた。あくまでも「おぼしめす」という単純形に対しての言表態度を測定したいと判断したためである。

表2 「おぼしめす」に下接する助動詞

下接語	使用数	使用率
る	187	24.04%
たり	123	15.81%
けり	94	12.08%
ナシ（終止）	82	10.54%
べし	55	7.07%
ナシ（連体）	42	5.40%
けむ	26	3.34%
らむ	24	3.08%
む	23	2.96%
なり	23	2.96%
つ	20	2.57%
き	18	2.31%
ず	17	2.19%
その他	44	5.66%

これを見ると「る」「たり」「けり」「べし」が目立つ。さらに判断が直接関与しない、もしくは付加されていないと考えられる終止形・連体形が多く見える。これらの使用率を合計すると七五％に達し、全体の四分の三がこれらによって占められており、「おぼしめす」の表現価値と深い関係を持っている下接語として取り出してよいと考えられる。そこでこれらの辞は「おぼしめす」の表現価値とどう関わるのか、また表現主体の判断や認め方を付加しない終止形や体言接続の連体形を多用するのは何を表わしているのかを考えてみる。

ではひとつずつ検討をしていく。

時のまもおほつかなかりしをかくても月日はへにけりあさましうおぼしめさる（源氏物語・桐壺）

つれなく申たまふに、いとあさましくおぼしめさる。（大鏡・巻五）

最も多かったのは「る」が下接するものである。「る」が多く見えるのも、これが尊敬の意を表わす助動詞であることから自然なものであると考えられる。「る」は「おぼしめす」にさらに敬意を加える形の「おぼしめさる」という表現形式で使用されている。通常「おぼしめさる」は「おぼしめす」より一段高い敬意を表わすと説明されているものである。「る」自体は時枝氏が助動詞とせずに接尾語としたほどで、話し手の主体的な判断の色は極めて薄いものである。(注5)「おぼしめす」動作主への積極的な判断や考えを加えるものではない。

御もののけにて時々なやませ給こともありつれといとかくうちはへをやみなきさまにはおはしまさゝりつるをこのたひは猶かきりなりとおほしめしたり（源氏物語・若葉上）

人に誉められ、帝もよき人に思（し）召（し）たれば、ましていかならん事をし給へりとも、の給ふまじ。（落窪物語・巻二）

続いて頻用されるがアスペクトを示す「たり」である。「たり」はもともと「て＋あり」の形であったと考えられており、そうすると「おぼしめしたり」は「おぼしめしてあり」と理解することができる。つまり高位の人物がそう思っているという状態をどこまでも客観的に定位した表現形式であると考えられるのである。源氏物語、落窪物語の両例とも次の行動を必然的に導く院・帝の判断を客観的

Osaka Shoin Women's University Repository

に定位している。アスペクト的には「たり」は動作の完成とその結果の存続を表わすのに対して「つ」の方は動作の完成のみを表わす。また「ぬ」は結果の達成のみを表わす。[注6] これを「おぼしめす」の表現価値に関わらせて解釈すると、行為者の判断の完成とともにその判断の持続するということが「おぼしめしたり」という表現形式によって示されているといえよう。完成し、継続しているその事態（思惟内容）に、表現主体はなんら関与することのできない絶対性や超越性があることはいうまでもない。「つ」や「ぬ」が「おぼしめす」に「たり」のように数多く下接していかないのは、こうしたこの語の持つ表現価値と深い関係があると考えられるのである。「たり」は傍観的に事態を眺めるときに使われることが多いとされるが、[注7] 権力者の判断に対峙する、もしくは介入することができずに従うだけだという状況にあっている。

さらぬさきにさもやほのめかしてましなとおり〳〵おほしめしけり（源氏物語・宿木）

いかでなほ、すこしひがごと見つけてをやまむと、ねたきまでにおぼしめしけるに、十巻にもなりぬ。（枕草子・二二段）

前者は今上帝がわが娘である女二宮と薫の縁組を画策するくだりで、事態はこの帝の判断の通り進行する。後者は村上天皇が宣耀殿女御の和歌を試すところで、誰も止められないほど帝がむきになっている様子を描いている。「けり」はテンスを表わす助動詞で、古来その意味・用法については議論の絶えないものであるが、対象を客体化し距離をおいたものを叙述するという点で理解できると思われ、竹岡正夫氏の「あなたなる世界」の叙述という発言が想起される。[注8] するとこれもまた「おぼしめす」の表現価値と一脈通ずるものがある。阪倉篤義氏は『竹取物語・伊勢物語・大和物語』（日本古典文学大系、一九五七年）の解説において、竹取物語の物語の構成と「けり」との関わりを論じられてこう述べていられる。

一体、この「けり」という助動詞は、過去というよりは、むしろ完了の助動詞的であって、「き」が、過去の事象を、それとして主観的に回想する態度を表わすに対して、いわばそれをある程度客観視して、常に現在との関聯において見る態度を示すものと言うことが出来る。そこから、一種、説明的な叙述の態度が、この「けり」には認められるのである。

「けり」にアスペクト的な意味を認め、そこから対象を傍観するしかないという表現価値を拾い出しているが、これはまさしく「おぼしめす」の示すものと一致するのである。すなわち「おぼしめす」の動作主はあくまでもこちらの意志や想像を越えた位置にある人物であるから、それを描くのはあくまでも客観的に離れた位置からしか述べることができないのであった。[注9] なお「おぼしめす」に下接する「き」は源氏物語において二例（二・八一％）のところ、「おぼす」では六二例（五・〇九％）と大きな差を見せている。

かしこまりたるさまにて御いらへもきこえ給はねは心ゆかぬなめりといとおしくおほしめす（源氏物語・紅葉賀）

そのころ右大将やまゐしてし給けるをこの中納言に御賀の程よろこひくはへんとおほしめしてにはかになさせ給つ（源氏物

Osaka Shoin Women's University Repository

語・若菜上）

「ナシ」の多いのも注目される。「ナシ」というのはそこで文が終止する、もしくは中止法で切れる、連体修飾法で下にかかる場合であり、その後に話し手の主体的な言表態度がなんら加えられないものである。紅葉賀の例は桐壺帝が光源氏が正妻である葵上のことを気に入っていないのだろうと気の毒に思うもの、若菜上のものは冷泉帝が光源氏の四十賀を計画し、その責任者に夕霧を選定する。そして賀にめでたさを加えようとちょうど空席になった右大将の地位に夕霧を急遽つけるというものである。正妻を大切にしない行為であるとか、中納言兼右大将という異例の昇進といった事態であっても、帝の判断が絶対的な正当性を与えている。このような形式が上位の使用数を見せているのも、話し手の主体的な態度が極端に抑えられて、ただ事実だけを淡々と提示していくことを示しており、「おぼしめす」の持つ表現価値が影響していると考えざるをえない。

いてそのふりせぬあたけこそはいとうしろめたけれとはの給すれとけにあまたの中にかゝつらひてめさましかるへきおもひはありとも猶やかておやさまにさためたるにてさもやゆつりをきこえましなともおほしめすへし（源氏物語・若菜上）

北の方もれいの人のなかのやうにこそおはしまさねど夜ごとにいでんもあやしとおぼしめすべし。（和泉式部日記）

推量系では「べし」が最も多く使用されている。源氏物語の方は朱雀院が女三宮の処遇を源氏にゆだねることを思うくだり、和泉式部日記の方は敦道親王の北の方藤原済時娘が連夜の宮の行動をあやしく思うというものである。「べし」は義務や意志・命令・確認などを表わすことから、推量といっても極めて必然の色合いの濃いものである。「べし」そのものは本来事態に関わる動作や状態を必然のものとして受け入れるほかないという判断を表わすものであった。したがって個人の感情や希望を越えた必然的な状態として判断していることになる。表現主体は「おぼしめす」の動作主を現前で確認しているのではなくても、結果として存在し、今も効力を持っている判断や思惟のあることを当然であると推量し認めているのである。いずれにしても推量といっても話し手の考えを介入させる余地はほとんどないものである。引用例は両者ともそれをよく示している。これもまたまさしく「おぼしめす」の表わす判断の性質と一致している。

また注意したいのが打ち消しの「ず」がほとんど下接しないことである。源氏物語ではわずかに三例（会話一・地二）であるが、二例は「おぼしめしかはる」「おぼしめしわく」という複合動詞であり、「おぼしめす」につくのは一例だけである。

あるかなきかにきえいりつゝものし給を御覧するにきし方ふくすゑおほしめされず（源氏物語・桐壺）

毎年の季節御読経なれど、常のことゝもおぼしめしたらず（大鏡・第二巻）

さらに調査した全作品でも宇津保物語に二例・栄花物語に一一例・大鏡に一例しか現われていない。これは「おぼしめす」の全用例の二％にすぎない。「おもふ」や「おぼす」がごく普通に「おもはず」

Osaka Shoin Women's University Repository

「おぼさず」の形を取るのとは様子が違う。源氏物語の「おぼす」全用例の下接する助動詞を調べると、「ず」は六三例見え、「おぼしめす」の場合とは対照的である。これも「おぼしめす」の表現価値が関係しているのであろう。これは「おぼしめす」があくまでも判断や思推を行なったという動作主の姿もしくは事態を示すことに本来の目的があるためで、それを打ち消すような表現はその目的と強く矛盾することになるからであろう。

これらから「おぼしめす」の下接語は自在に取り得るものではないことがわかる。あくまでも「おぼしめす」と表現価値の傾向が一致するものだけが続くのである。

このように「おぼしめす」の表わす語彙的意味を考察してくると、「おぼしめす」が謙譲語を取りえない理由もおのずから明らかとなる。これは尊敬語と謙譲語の承接順序の問題もさることながら、「おぼしめす」自身の内包する語彙的な意味や表現価値が謙譲語と大きく矛盾するような属性を持っているからである。表現主体の判断すら拒否するような性格を持っている「おぼしめす」は、その動作主の持つ絶対性や超越性・支配力を印象づけるだけであるから、それに反するような被動作主への敬意や顧慮といったものとはなじまないものである。

結

敬語の表わす敬意は動作主の属性の反映でもある。天皇に使用される敬語の表現価値は、自動的に天皇の持つ属性（社会的・制度的その他）を含むことになる。「おもふ」系の敬語である「おぼしめす」は、単に「おもふ」「おもひたまふ」「おぼす」「おぼしめす」という単線的な敬意の軽重の最高段階を表わしているだけではない。動作主が極めて高位な人物に限定されることや、状況によっては他の表現形式が選択されることは、この敬語が最高段階の敬意のみを表わそうとしたのではないことをうかがわせている。これらの語彙的な意味はけっして等価ではない。「おぼしめす」は支配者としての判断を見せているのあり、そう思惟される対象はそれを承けるほかないという状況を示している。そして「支配」「超越性」「絶対性」といった最高位のクラスに属する人物たちが持っていた社会的な属性を指示しているのである。つまりこれらの人物の思惟の絶対的正当性を強く反映した表現形式になっていると考えられる。そこには表現主体の個人的な判断や感情移入を許さない絶対性があるため、極めて客観的な描写に傾くと思われる。また同じ人物が常に「おぼしめす」ばかりでなく敬意が一段下がるとされる「おぼす」「おもひたまふ」が用いられることも、考慮する必要がある。これは判断内容及び判断状況に何らかの条件が揃わない限り、「おぼしめす」は用いられないと考えられるのである。「おぼしめす」が使用されるためには、動作主が支配者の立場を備えており、さらに対象の内容には配慮しない動作態度・判断を持っていることが必要である。

大方のご批判を賜れば幸いである。(注15)

Osaka Shoin Women's University Repository

（注1）『敬語講座2　上代・中古の敬語』（一九七三年）・辻村敏樹氏編『講座国語史5　敬語史』（一九七一年）・「国文学臨時増刊号　敬語セミナーA―Z」（一九八八年一二月）・小久保崇明氏『大鏡の語法の研究』（一九六七年）・松尾拾「『思す』及びその類語の発生と展開」（「国文学」一九六〇年一月）・中村幸弘氏「『思ひ～』型複合動詞の尊敬表現―『思ひ～給ふ』と『おぼし～』―」（『今泉博士古稀記念国語学論叢』一九七三年、所収）・岡田俊子氏「源氏物語における『思ふ』の敬語」（「香川大学国文研究」第1号、一九七六年九月）など。他にも「おもふ」系の敬語に直接間接に触れた論考は多い。

（注2）調査に使用した資料は以下のものである。

阪倉篤義・大津有一・築島裕・阿部俊子・今井源衛各氏校注『竹取物語・伊勢物語・大和物語』（日本古典文学大系、一九五七年）

渡辺実氏校注『伊勢物語』（日本古典集成、一九七六年）

塚原鉄雄・曾田文雄両氏編『大和物語総索引』（一九七〇年）

片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子各氏校注『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（日本古典文学全集、一九七二年）

宇津保物語研究会編『宇津保物語本文と索引』（一九七五年）

松尾聰・寺本直彦両氏校注『落窪物語・堤中納言物語』（日本古典文学大系、一九五七年）

池田亀鑑氏編著『源氏物語大成』（普及版、一九八四～一九八五年）

源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』（一九八九年、以下刊行中）

高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語本文と索引自立語索引篇』（一九八五年）

松村博司・山中裕両氏校注『栄花物語』（日本古典文学大系、一九六四年）

松村博司氏校注『大鏡』（日本古典文学大系、一九六〇年）

川瀬一馬氏校注『土佐日記』（講談社文庫、一九八九年）

佐伯梅友・伊牟田経久両氏編『かげろふ日記総索引』（一九八一年）

東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾各氏編『和泉式部日記総索引』（一九五九年）

藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫各氏校注『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（日本古典文学全集、一九七一年）

東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾各氏編『和泉式部日記総索引』（一九五六年）

田中重太郎氏編『枕冊子』（日本古典全書、一九四七年）

（注3）時枝誠記氏『国語学原論』（一九四一年）、『古典解釈のための日本文法』（一九五九年）など。

（注4）竹内美智子氏は「源氏物語の複合動詞」（『平安時代和文の研究』一九八六年、所収）という論文において、「源氏物語の

Osaka Shoin Women's University Repository

表現が、事柄を外側から描こうとするのではなく、常に主体の内面から、それとかかわりあうものとして事柄を捉え、深く掘り下げた内面的な視点から事柄を捉える姿勢を、貫いていることによるものだと思われる。」と述べ、この物語に頻出する「思ひ～」「おぼし～」の複合動詞を例として検討された。そして「源氏物語の「思ひ～」には、閉ざされた心の世界を描くためのものが極めて多いのである。」とされる。外面からの客観的描写に徹する「おぼしめす」とは対照的な性質であることがうかがえよう。

（注5）時枝誠記氏『国語学原論』（一九四一年）の第二篇第三章文法論の「辞より除外すべき受身可能使役敬謙の助動詞」の項参照。

（注6）此島正年氏『国語助動詞の研究　体系と歴史』（一九七三年）・鈴木泰氏『古代日本語動詞のテンス・アスペクト』（一九九二年）など。

（注7）根来司氏「枕草子における『たり』『り』」（『源氏物語枕草子の国語学的研究』一九七七年、所収）

（注8）竹岡正夫氏「助動詞『けり』の本義と機能―源氏物語・紫式部日記・枕草子を資料として―」（「言語と文芸」三一号、一九六三年一一月）

（注9）物語という形式を分析するために文学研究においても早くから「けり」の性質は注目されている。最近では藤井貞和氏が「『けり』に詠嘆の意味はあるか」（『物語の方法』一九九二年、所収）において、「けり」は単なる過去や回想を表わすのではなくて、過去から現在への経過・伝来を示す性質を持つと述べ、そこからアスペクト的助動詞であると認定している。

（注10）今後は敬意の差とだけ説明されてきた敬語の段階的使用について、その表現価値を再検討する必要があると思われる。また個々の作品や伝本、位相による運用についても考察を深めなければならない。例えば「みる」系の最高敬語といわれている「御覧ず」の表現価値を分析した藤原浩史氏の「漢語サ変動詞『御覧ず』の表現価値」（「国語学」一七六集、一九九四年三月）などは、敬語研究の新たな展開をもたらすものであると思う。ついて見られたい。